

先住民族の知恵を活かす防災教育

— 北海道・沙流川流域における
アイヌ民族の津波口碑の事例研究 —

Education for Disaster Prevention
Utilizing Indigenous Traditional Knowledge:
Case Study on Ainu Peoples' Oral Tradition about
Tsunami Disaster of Saru River Basin in Hokkaido

野元 弘幸

NOMOTO Hiroyuki

はじめに

筆者は、2015年から2019年までの5年間、日本学術振興会の科学研究費助成を受けて、「社会教育における防災教育のグローバル展開」という課題で、国内外の社会教育研究者と共同研究を行っている。目的は、首都直下型地震や南海トラフ地震など、今後予想される災害において、地域や学校で一人の犠牲者も出さないための教育実践のあり様を検討することにある。

契機となったのは、東日本大震災によって2万人近い人々が犠牲となったことである。それらの犠牲者の中に、地域や学校で事前の防災学習・防災教育や防災訓練がしっかりと行われていれば命を失わずにすんだ人々が多くいたことが明らかになっており、あらためて地域や学校における防災教育が重要との考えに至った⁽¹⁾。

この共同研究の課題の一つとして、「先住民族の知恵を活かす防災教育」が位置づけられている。東日本大震災に関わって、先住民族をめぐる研究課題を設定するきっかけとなった二つの出来事があった。一つは、岩手県大船渡市をは

じめとする被災地の三陸海岸で、アイヌ語由来の地名が多く残るなど、思いがけずアイヌ民族と関連する事柄との出会いがあったことである。筆者が大船渡市において災害支援ボランティアの宿泊所としての運営に携わる立根（たっこん）地区公民館の、立根の地名の由来は、アイヌ語の「タブコブ」（周囲からよく見える丘・山という意味）と言われる⁽²⁾。また、大船渡市の蛸ノ浦（たこのうら）地区にある尾崎（おさき）神社の旧名称が「理訓許段（りくこた）神社」といい、アイヌ語で「高いところにある村」という意味で、ご神体がアイヌ民族が神事で使用する「イナウ」（柳の木などを削って作られる御幣）であることを知った。

二つ目は、北海道沙流郡平取（びらとり）町紫雲古津（しうんこつ）に住むアイヌ民族の長老である鍋沢保（なべさわ・たもつ）氏から偶然聞いた、沙流川の大津波に関するアイヌ民族の口碑・言い伝えであった。筆者が、東日本大震災の被災地の復旧・復興支援に関わりながら、津波犠牲者をなくすための防災教育のあり方を研究しているということを鍋沢氏に話したとき、氏から、江戸時代前期（17世紀）に、現在の平取町まで沙流川を津波が遡上し、多くのアイヌの人々が亡くなったとの話を聞いたのである。2013年まで、先住民族・アイヌ民族の教育に関する研究を重点的に行っていた筆者は、防災教育においても引き続き、先住民族の口碑や伝承を活かす防災教育研究に取り組むこととした。

1. 問題意識

2004年のスマトラ沖地震や2011年の東日本大震災における津波被害以降、国内外で先住民族の口碑・言い伝えや口承史に語られている過去の大災害の記録を掘り起こし、現代の防災対策や防災教育を活かす取り組みや研究が進んでいる。

例えば、2004年スマトラ沖地震で甚大な津波被害を受けたタイのインド洋湾岸で、海洋民族であるモーケン族が、大津波に襲われたにも関わらず、民族固有の伝統的な知識を活かして、大きな被害から逃れられたということに注目が集まり、先住民族の津波伝承を活かす国際的な交流活動が行われてきている⁽³⁾。

アオテアロア⁽⁴⁾／ニュージーランドは、日本と同様に、太平洋プレートの潜り込みによる地震や津波が多く、火山噴火や地滑りを含む自然災害に関するマ

オリ民族の口碑を防災対策に活かすための研究が活発に行われている。中心になっているのが、ニュージーランド気象協会のダレン N.T キング Darren N.T. Kingらのグループである⁽⁵⁾。日本と比較するとアオテアロア／ニュージーランドの口碑や伝承の歴史は浅い。というのも、マオリ民族がポリネシアの島々を伝い、アオテアロア／ニュージーランドに7艘の船で移住したのは1350年と言われており、ヨーロッパ人として初めてジェームズ・クックが上陸したのは1769年で、マオリ民族のアオテアロアにおける口碑といっても14世紀以降である。869年の貞観津波の記録が文字として残る日本と比較すると、歴史は短い。しかし、その中で津波堆積物や津波石の分析と口碑を照合させる地道な調査研究が行われている。

北海道では、東日本大震災の津波被害が及んだことに加えて、北海道東部地震による大きな津波被害が想定され始めたことから、改めて北海道の先住民族であるアイヌ民族の災害に関する口碑に着目する研究の重要性が増している。

北海道の自治体が現在、防災において重点的に取り組んでいるのが、釧路・根室地方などを中心に北海道東方沖でおきる地震に伴う津波被害に関するものである。浜中町では、2012年に北海道が見直した新たな津波想定では、同地震が発生した場合、道東の浜中町の琵琶瀬（びわせ）湾岸には21分後に最大34.6メートルの津波が到達することが想定されており⁽⁶⁾、対応に迫られている。この釧路地方では、1940年に北海道廳編『北海道の口碑傳説』に採録された「クシロの津波」、1968年に佐藤直太郎により記録された「津波と春採湖」（春採：はるとり）などのアイヌ民族による口碑伝説があり、かつて20数メートルの津波が釧路市郊外の春採湖周辺を襲った可能性の高いことが示されている⁽⁷⁾。

ところが、こうした研究が進められているにもかかわらず、研究成果を実際の防災対策や活動に活かす動きは鈍い。その背景には、口碑や言い伝えに対する信頼性を疑問視する考え方があるのは間違いないが、アイヌ民族の災害に関する口碑に注目する研究者でも、アイヌ民族の口碑や言い伝えから想定される30mや40mという津波高や遡上高を、あり得ない高さと考え、口碑そのものの信ぴょう性を疑うケースも見られる。

本研究は、アイヌ民族の口碑が、津波被害の高い危険性を示していると思わ

れるにもかかわらず、信ぴょう性が疑われ、研究が進まず、実際に地域住民の防災対策や訓練、防災学習・教育に十分に活かされていない事例を取り上げて検討する。

2. 先行研究の検討

北海道における過去の大規模災害に関するアイヌ民族の口碑に着目する研究は、主に高清水康博らの地質学研究者グループにより行われてきた。着目すべき先行研究は2点ある。

一つは、高清水康博の「北海道における津波に関するアイヌの口碑伝説と記録」⁽⁸⁾ (2005年)である。これは、地質学研究者である高清水が、先住民族の口碑に注目して、その記録を整理するもので、更科源蔵をはじめとするアイヌの伝説や言い伝えを記録する文献の中から、北海道内の40の事例を分析している。津波堆積物などの地質学的な検証を行ったものではなく、その前段階の基礎的な研究と言える。

北海道における先住民族の口碑と自然災害に注目した基礎的な研究としては評価できるが、いくつかの点で問題があったことを指摘せざるを得ない。まず、「『過去に津波に襲われた可能性がアイヌの口碑伝説に残されていたかどうか』であるので、口碑伝説自身の内容が事実かどうかを検証するものではない」としながらも、根拠をしっかりと示さないまま、「標高15m、海岸からの距離5kmまでの地域に津波が襲った可能性」の有無について言及し、判断している点である。本論で取り上げる平取町の伝説「沙流川の津波伝説」と「日高沙流太の大海嘯」については、それらが、沙流川中流の「海拔約70メートル」「太平洋からの直線距離で約30km」にあるロクンデエト⁹遺跡⁽⁹⁾の津波に関わる伝承を伝えていたとの理由で、信ぴょう性がない（「可能性なし」）と退けている。

また、高清水は、信頼に足る記録に関して次のように述べている。「アイヌの記録の中で津波に襲われたと推定される地域が、現在の海拔標高15m以下、海岸からの距離数が5km以下をその可能性のある場所とした。ただし、津波の遡上ルートが詳細に記録されているものに関しては、標高15mを超えたものでも信頼性が高いとし、過去に津波に襲われた地域である可能性がある」。北海道南

西沖地震（1993年7月）における奥尻島での津波最高遡上高30.6m、東日本大震災（2011年3月）における岩手県宮古市での最高遡上高が40.5mに上ったこと、また、同震災で北上川を津波が49キロ遡上したことを考慮すれば、この条件でスクリーニングすることは適切ではない。東日本大震災以前の研究成果として、ここには限界があったと言わざるを得ない。

もう一つの研究は、「北海道の津波堆積物研究の現状と課題：17世紀巨大津波による堆積物の研究を中心に」⁽¹⁰⁾（2013年）で、2011年の東日本大震災による巨大津波発生を受けて、北海道内の津波堆積物に関する研究成果を緊急にまとめる必要があるとの判断からまとめられたものである。十勝・根室沖の地震、1640年の北海道駒ヶ岳の山体崩壊起源津波、胆振（いぶり）海岸に分布する波源不明の3つの17世紀巨大津波の分析をもとに提言をまとめているが、未解明の部分が多い太平洋側の17世紀巨大津波の詳細な分布と発生年の解明を重要課題として以下の5つを提示している。

- ①道東地域の運動型地震による17世紀巨大津波は襟裳岬を越えてどのように伝播したのか（あるいはしなかったのか）。
- ②逆に北方領土の沖へは、どのように伝播したのか（あるいはしなかったのか）。
- ③1640年の北海道駒ヶ岳起源の巨大津波は、胆振・日高海岸へどのように到達したのか（あるいはしなかったのか）。
- ④胆振海岸17世紀津波の波源はどこなのか。
- ⑤日高海岸および胆振海岸は繰り返し巨大津波が襲う地域なのかどうか（もしそうであるとしたら再来間隔はどのくらいなのか）。

高清水康博らは、2007年に発表した「北海道胆振海岸東部から確認された17世紀の津波堆積物」⁽¹¹⁾において、同地で最も高いところで8mの高さまで津波到達を確認できたことに加えて、2010年の日本堆積学会茨城大会においては、日高海岸での先行調査で津波堆積物の可能性のある砂層を見いだして、この17世紀の巨大津波が日高海岸地域をどのように襲ったかについて、地形の特殊性から「局所的に異常に高い遡上高を持つ可能性が考えられ、津波浸水履歴の解明は重要な課題として残っている」と指摘している。

しかしながら、2011年の東日本大震災前に自らが行った調査で結論づけた、沙流川流域の津波伝説についてその信ぴょう性は疑わしいという結論の見直しには至っていない。

3. 課題の設定と研究方法

地質学研究者による先行研究から、沙流川流域の大津波に関するアイヌ民族による口碑の信ぴょう性が疑われていること、一方で、17世紀に北海道胆振・日高地方で巨大津波が発生した可能性が高く、その津波の高さは8メートル近くに及ぶこと、そして、日高地方における津波堆積物の調査が今後の課題となっていることがわかった。

そこで、筆者は、① 沙流川流域のアイヌ民族の口碑・言い伝えが信頼に値しないものなのかを検証するとともに、② 沙流川流域自治体の津波対策にこうしたアイヌ民族の口碑・言い伝えが活かされているかどうかを把握することを研究課題として設定した。

その上で、アイヌ民族の口碑の信頼性が高く、それらが行政の防災対策に活かされていないとすれば、早急に津波対策の見直しを求める提言を行っていくこととした。

①については、沙流川流域のアイヌ民族の口碑に関わる現地調査を行うと同時に、北海道沙流郡平取町のアイヌ民族の長老、鍋沢保氏への聞き取りと、その聞き取りに基づく現地調査を行った。

- ・鍋沢保氏への聞き取り (2016年2月24日および8月24日)
- ・沙流川河口「シノタイ遺跡」「チホマコツ」の現地確認 (2016年8月24日)
- ・ロクンデエト^o 遺跡の確認 (2016年8月24日)
- ・平取町アイヌ文化保全対策室における聞き取り (2016年8月25日)
- ・日高町立門別図書館郷土資料館における聞き取りと資料収集 (2016年8月23日)

②については、以下での聞き取りと情報収集を行った。

- ・日高町役場総務課情報防災グループ (2016年2月24日)
- ・平取町役場まちづくり課 (2016年2月24日)

・日高町立富川小学校（2016年8月24日）

なお、筆者は、アイヌ民族に関わる学術研究は、アイヌ民族との共同の研究でなくてはならないという立場から⁽¹²⁾、アイヌ民族の島崎直美氏に研究に参加いただき、アドバイスをいただいている。

また、鍋沢保氏には聞き取りを行いながら、多くの貴重なアドバイスをいただいております。本研究がこれらのアイヌの方々との共同研究という性格を有することをここで確認したい。

4. 沙流川流域における津波口碑の事例研究

(1) アイヌ民族長老・鍋沢保氏の聞き取りから

聞き取りは、2016年2月24日および8月24日の2回、鍋沢保氏の自宅を訪問して実施し、2月24日については、口碑内容に関する現地視察も行った。確認された内容は以下の通りである⁽¹³⁾。鍋沢保氏は、「小さい、物心ついた頃からさ、祖母たちが、電気もテレビも何にもない時代だけど、集まって、顔の見えるか見えなかつたのほの明るいところで昔語りするのよ」と祖母から伝え聞いた話であると語っている。

①大津波の遡上の様子

沙流川河口にあったアイヌのシノタイ集落（コタン）を襲った津波の言い伝えについて次のように語った。

一大事ということでね、みんな逃げたけど、血気盛んな若者は、この沙流川沿い、川伝いに逃げよう逃げようとしたんだけど、津波は、秒速、スピード違反の車くらい速いからね。川伝いに逃げた人たちは、若者、元気な者ほどさらわれたのよ。そして、老人、女、子どもが、シノタイの集落の上に、ヤムニタイというところがあるんだよ。ヤムニタイというのは、柏の木原があるんだよ、いよいよそこに逃げのびた人たちは、津波からさらわれることなく難を逃れたという。こういうこと。元気がいいのはいいけど、元気がいいゆえに命を落とした人もいるんだ。

また、沙流川の川幅が、平取本町付近で極端に狭くなっているために津波が激しく崖にぶつかり大きな水柱が立ったという、地形と津波遡上高の因果を説明する次のような話を聞くことができた。

そしてその時ね、その押し寄せた津波は、今、先生（筆者注：インタビューである筆者を指す）が通る道（筆者注：現国道237号線〈通称日高国道〉）は、あれは、何年にもならない新しい道だからね。その平取開町以来ずっと続いている100年以上も古い道路ちゅうのは、今の街を通って行く、左側の山すそを走っているあれが本当の昔からの道路なんだ。あそこのことをハイオピラと言うんだよ。ハイオピラは、平取町の地名の語源だよ。

そうしたらね、あそこだけ、何億年も何万年も変わらない場所。だって両側に岩山だから。水に侵食されないでしょう。あとは平取から下流、紫雲古津は1年か2年であっち行ったりこっち行ったり変わるでしょう。遮るものがないから、頑強な岩山だから、変わらないでしょう。この沙流川の歴史以来、まったく、びくともしない、移動しないはあそこのことだ。

そして、あそこが漏斗のように狭いもんだからね、津波がぶつかって、テトラポットみたいに、数十メートル立ち上がったんだけどね。そして、引き波によって、当時流域にいた私たちの祖先がね、太平洋にもっていかれたんだけど。幸いにして、二風谷（にぶたに）でも上流の人はね、水をかぶったとしても人的被害はなかったの。

②津波襲来の時期

津波発生時期に関する貴重な語りも得られた。津波で打ち上げられた犠牲者をカラスがついばみ、「異臭が漂って、鼻をつまむほど」であった、したがって津波は夏から秋の暑い時期であったろう、と語っている。

津波でアイヌがさらわれて、太平洋にもって行かれたでしょう。でも、直にさらわれた人もいるけれども、途中で岩山とか、立木に寄りかかって死んでいる人が数多くいる。そして、もちろん、自分が生まれている訳じゃ

ないけれども、推測の部分だけど、これは、まったく冬のどまん中のことでないことがわかる。冬のまん中ではないんだって。だから「エト°カラ ホロ セフ フラ ポヘネ」ということは、「いよいよ異臭が漂って、鼻をつまむだけ」ということはね、真冬はそんなに腐食して、異臭は漂わないよ。その様を言ったんじゃない。「エト°カラ ホロセフ フラ ポヘネ。パシクル トッパ トッパ」(筆者注：後半部は、「カラスがツン・ツンとついばむ」となるんだ。そしたら、そこら辺の岩とか立木に寄りかかって死んでいる人はね、下手物食いの王様がカラスでしょう。カラスが来てついばんでいるわけよ。その、ものすごい異臭だということは、まだ秋口だよ。夏から秋にかけて。そこで時期がわかるわけよ。

先行研究において高清水らは、17世紀に胆振・日高地方を波源不明の大津波が襲っており、その一つが北海道駒ヶ岳の噴火に伴う山体崩壊によるものである可能性を指摘しているが、噴火は寛永17年6月13日(西暦1640年7月31日)で、津波の発生が夏期であるとする鍋沢保氏の語りと一致する。

③口碑の信頼性について

祖母から聞いて受け継いだ口碑が、単なる作り話ではないことを、イナキビ・ヒエの栽培に関わる発掘調査を例に語った。沙流川流域のダム建設関連の委員会で、アイヌ民族が農耕をやっていたかどうか、発掘調査をしてはという意見が出されて、実施したところ、実際に小さいころに祖母から聞いた話が本当であったことが証明されたという。

だけどアイヌもね、狩猟一辺倒の生活かと思ったら、さにあらず。アイヌもね、遙かな昔から、水稻は栽培してないけど、イナキビやヒエは栽培している。それが今のダム建設でね、自分も委員の一人だけど、大阪の博物館の大塚昌義先生も委員だったんだ。そして、大塚先生が、「歴史を確認だから、発掘調査したら」という提案があったの。そしたら、委員の、ほとんどの人は、「発掘調査してまで」という否定的な声があったけど。私はさ、

思ったの。小さい、物心ついた頃からさ、祖母たちの、電気もテレビも何にもない時代だけど、集まって、顔の見えるか見えないかのほの明るいところで昔語りするのよ。その中で「クスイエフ トイタ」(筆者注：山バトが畑を耕す)云々、というのを聞くでしょう。食べ物を作った話を。それをずっと思っていた。

④津波由来の地名「荷葉」(ニナ)について

平取町内にある地区「荷葉」の語源は、アイヌ語の「ヒラメ」で、17世紀に沙流川で発生した大津波で多くのオヒョウ(カレイ科の大型魚で、北海道での呼び名。古くはヒラメと区別されなかったという。)が打ちあがったことから、「荷葉」と名付けられたという。

また、明治初期に、政府役人が、この荷葉地区に住むアイヌの人々に苗字をつける際に、こうした言い伝えを参考に「平目」という苗字をつけたといわれる。これに関して次のように語っている。

明治以前はさ、アイヌに、いや日本の社会もそうだけど、苗字は武家だけで、一般庶民はなかったじゃない。アイヌよりは早くついているけどね。明治政府によって、やっぱり、日本社会は租税対象したいわけさ。人別帳を作って人口を確認しないと、税金課税できないでしょう。まあそれを考えるな。そういうもんだ。天皇家が築いた租税、権力社会だから。だから、当時の役場というか職員みたいな人が、集落に行っただけ、古老の話を聞いて、「そうか、そんな大きな魚がいたら、オヒョウだか、ヒラメだから、よし」。

それから、二風谷の人は貝澤でしょう。あの博物館の後ろに行ったら、それこそ農業も始まったか始まらないくらい、川のきれいな時代だから、そしたら、あの川のそばで、3つか4つか、ちょっとした集落があって、その人らに、「あれは何じゃ」って聞いたたら、そこの古老、エカシたちが、「ピパでございます」と答えたのよ。「ピパったら何じゃ」と言ったら、貝だという。沢にいっぱい、砂利のようにピパがいっぱいいるでしょう。「貝がたくさんいる沢だな」、何のことはない、ピパウシナイ。「よしお前たちの名

前は貝澤だ」とこうなるんだ。簡単に言うけど、間違った付け方ではないわな。そういうことだ。命名の由来は、そういうもんだ。

(2) 沙流川河口「シノタイ遺跡」「チホマコツ」の確認

シノタイ遺跡は、沙流川河口のシノタイ崎にある縄文文化からアイヌ文化期に至るアイヌの遺跡で、集落（コタン）とメカジキの送り場があったことで知られる。このシノタイには、沙流川の大津波に関する口碑として「シノタイの黒狐の神の伝承」（鍋沢元蔵翁伝承：『アイヌの祈詞』）が残っており、平取町の鍋沢保氏も語っている。鍋沢元蔵翁は、鍋沢保氏の祖父にあたる。『沙流郡のアイヌ語地名Ⅰ』⁽¹³⁾から引用すると次のようである。

むかし、浜辺で漁をしていた人たちが、或る日どうも空が曇っていたので、沖に出るのを見合わせていた。

すると夜中になって山の中に棲む狐が騒ぎ出した。それも普通の鳴き声ではないので、何かのお知らせであろうと思って戸外へ出てみると、沖の方が火の燃える様に真赤になっている。これは大変、オレブンペ orepunpe〈津波〉に違いない。狐が知らせてくれたに違いないと思って、みんな山の方へ避難し始めた。

ある人は狐の居るシノタイエトコの山へ、別の人たちは川向かいの山へと、それぞれ二手に分かれて逃げた。

やがて、思った通り津波がやって来た。ところが川向かいの山へ逃げた人たちは、山が高いから大丈夫と思っていたが、津波を受けて3回目の時は、山の凹みに積み重なって死んでしまった。この凹みの場所を後にチホマコツ chihomakot〈恐ろしい凹地〉といわれた。

一方、シノタイのエトコでは、津波が押し寄せると波はそこで2つに切れて山へ行き、引き波も2つに割れて3回押し寄せた。どの大波もこの丘を避けて、人々はみな無事に助かった。

このような事があってから、人々はこの山に棲む黒狐 kunne-situnupe を守護神として祀るようになった。（鍋沢元蔵翁伝承：『アイヌの祝詞』）

鍋沢元蔵氏の語りにある地形をたどると、語り通りの地形があり、高清水らが指摘した、17世紀の高さ8メートルの津波と同様の津波が襲ってきた場合、伝説と同じ悲劇が繰り返される可能性があるように思われた。

また、この口碑において注目すべきは、「沖の方が火の燃える様に真赤になっている」という表現である。17世紀の沙流川の大津波の発生時期が夏期であり、1640年の北海道駒ヶ岳の大噴火による山体崩壊による津波発生も夏期で一致することは先に述べたが、沖が火のように真赤に染まっていたのが駒ヶ岳の火山噴火によるものだとすると説明がつく。

(3) ロクンデエト°遺跡の確認

ロクンデエト°の遺跡は、沙流川中流にあり、高清水によれば、「海拔約70メートル」「太平洋からの直線距離で約30km」にある。更科源蔵が「沙流川の津波伝説」で次のように記述している。

沙流川中流のオーッコナイと幌毛志との間の川向に、川に向かって突出した岩はロクンデエト°といって、昔、津波のとき、弁財船がここまで押し上げられてひっかかり、それが岩になったのだ。

このロクンデエト°の岩の津波伝説は、沙流川を巨大津波が遡上して現平取町の振内（フリナイ）地区まで到着した可能性を示す口碑であるが、高清水（2005）は「可能性なし」と結論づけている。

しかし、現地を視察すると、川幅が極端に狭くなっていること、また岩自体は海拔が高くても、河面は必ずしも高くないことが分かった。

鍋沢保氏の推察通り、平取町のハイオピラから極端に川幅狭くなったことで波高が極端に高くなっていると仮定すると、可能性は否定できないと思われる。

(4) 平取町アイヌ文化保全対策室における聞き取り

職員からの聞き取りでは、①ロクンデエト°遺跡にまつわる口碑の信頼性について、②地質調査の必要性について、重要な情報を得ることができた。

①のロクンデエト^o遺跡にまつわる口碑については、河床の低さや東日本大震災の津波高を考えると、津波が遺跡まで到達した可能性があると考えているとのことであった。

②に地質調査については、したがって、二風谷ダムや平取ダム建設に関わって実施されたボーリング調査の結果などの情報収集も含めて、地質調査を実施することが必要であろう、ということであった。

(5) 日高町立門別図書館郷土資料館における聞き取りと資料収集

日高町立門別図書館郷土資料館は、シノタイ遺跡に関する貴重な資料が収集・展示されている。聞き取りを実施した2016年8月23日時点の企画展で、日高地方の開拓者飯田信三関連の資料が展示され、学芸員の話聞くことができた。ここでは、以下の重要な2点について知ることができた。

一つは、アイヌの言い伝えの中には、明治の洪水による被害の惨状と混同している可能性があるという指摘である。明治31年9月6日の洪水は、平取町29名、門別町で29名、佐留太小学校（現富川小学校）が流失する大災害で⁽¹⁵⁾、流された人が木に引っかかるなどの姿で発見された、ということであった。確かに、鍋沢保氏の語りにおける、津波被害の状況と重なるところがある。この点は慎重に分析する必要があるだろう。

もう一点は、飯田信三関連の資料の内、明治42年8月8日発行の「日高の友」第19号⁽¹⁶⁾に、平取町「荷葉」のアイヌ住民が、明治19年に開拓移住者救済の土地払い下げ時に、沙流川東岸から西岸に移ったという記述が見られる点である。「日高の友」に次のように掲載している。

荷葉 明治三年仙臺藩士二戸移住同十九年授産の時東岸のアイヌを西岸サラバに移す。

これは、現在の荷葉が、かつて沙流川東岸にあったこと、したがって、その地名が由来するヒラメが打ち上がった場所が、東岸の河川に近い低地帯であったことがわかる。

『平取町百年史』⁽¹⁷⁾にも、松浦武四郎の『山川取調図』に基づき、荷葉の地名の由来について次のような記述がある。

ニナ ハンケニナ・ペンケニナ(『山川取調図』ニナ)・・・昔、海嘯(津波)の時、比目魚が此処まで上り来たりしによる。ニナは比目魚の夷言(東岸に小川並ぶ、昔は川端に村、今畑のみ)。

以上のことから、17世紀の津波堆積物の調査を行う場合は、かつて荷葉のアイヌが住んでいた東岸を対象としなくてはならないであろう。

5. 沙流川流域の自治体および教育機関における津波対策

(1) 日高町役場総務課情報防災グループにおける聞き取り

日高町は、人口12,490人(2016年7月末現在)⁽¹⁸⁾で、2006年に旧日高町と門別町が飛び地合併し、日高地区と門別地区の2地区わかれている。門別地区は、沙流川、門別川、波恵川、慶能舞川、賀張川、厚別川流域に位置しており、災害対策においても津波ハザードマップ⁽¹⁹⁾が作成されており、津波災害への対応が求められている。40分前後に第一波が到着し、各地区の津波想定高は、富浜地区海岸9.6メートル、門別本町地区沿岸9メートル、清島地区沿岸11.6メートル、厚賀地区沿岸9メートルとなっている。

日高町役場での聞き取りとハザードマップの分析から、以上の沿岸部の多くが津波浸水地域となっており、発災時の速やかな避難が求められるが、日高町立富川小学校は、河口から4キロ程度で海拔6.2メートルであるにもかかわらず、浸水想定地域に指定されていない。宮城県石巻市の大川小学校が、北上川の河口から約4キロで、海拔1メートルにあった校舎が10メートルの津波に襲われたことを参考にすると、日高町の想定の見直しが必要と思われる。

津波浸水想定域についても、地域の特性や津波遡上の特徴を適切に反映しているとは言い難い。日高自動車道の盛り土が、津波が内陸部に遡上するのを防ぐ防波堤の役割を果たすことが考えられるが、その分、盛り土で止められた津波が滞留すると予想される。そのように仮定すると、盛り土に隣接する富川中

学校も安全とは言えないのではなからうか。富川中学校から、日高自動車道へまっすぐに最短距離で上ることができる避難道や階段は整備されていない。

(2) 平取町役場まちづくり課における聞き取り

平取町は、沙流川中流・上流域に人口5,308人（2016年8月末現在）が住む⁽²⁰⁾。アイヌ民族の人口が多い。とりわけ二風谷地区の割合は高く、白老地区と同様に、二風谷アイヌ文化博物館が設置されるなど、アイヌ文化の継承活動が活発に行われている。

平取町は、これまでに紹介したような津波の伝説があるものの、沙流川を津波が遡上してくることを想定した防災対策はとっていない⁽²¹⁾。これは、沙流川河口で9.6メートルの津波が沙流川流域を遡上しても平取町の最も下流域の川向地区や紫雲古津地区までも到着しないという前提にたっている。

また、担当職員は、アイヌ民族の口碑として伝わる、沙流川の津波に関する伝承や荷葉地区の地名の由来などについての情報は持っていなかった。

(3) 日高町立富川小学校における聞き取り

2016年4月現在で、児童数は339名（16学級）在籍し、職員38名が勤務する。津波対策としては、「避難訓練実施要領（津波想定型）」⁽²²⁾が策定され、それに基づいて毎年9月1日に津波を想定した避難訓練を行っている。

学校経営における防災対策の位置づけは必ずしも強くなく、津波をはじめとする災害から身を守るための学習は、教育目標の柱として位置づけられてはいない。町のハザードマップによると、小学校は津波発生時の地区の避難所には指定されていないため、児童および教職員は町が指定する一時避難場所や高台へ避難することが求められるが、現時点で、津波浸水を想定した適切な避難ルート確保や道路整備はなされていない。

また、教育内容として、富川地区が洪水だけでなく津波被害の可能性のある地域であることや、アイヌ民族の伝説に「沙流川の大津波」があることなどは教えられていない。

6. 結論と課題

(1) 結論

沙流川の津波に関するアイヌ民族の口碑の検証から、17世紀に沙流川を津波が遡上し、アイヌの人々の溺死を含む、大きな被害を流域にもたらした可能性があることがわかった。そして、口碑の具体的な内容の分析から、1640年7月31日の北海道駒ヶ岳の噴火による山体崩壊で発生した津波である可能性が高いことが分かった。

ロクンデント^o遺跡に関する言い伝えについて、地質学研究者にとっては、にわかには信じがたいものであるとはいえ、沙流川が平取町で狭い崖の間を流れるという地形的な特徴から、遡上する津波が極端にその高さを増すことは十分に考えられる。

しかし、あくまでも可能性があるというにとどまり、最終的には、対象地域での津波堆積物の調査や津波のシミュレーションなど、地質学的研究を行わなくてはならない。可能性が高いと結論づけた以上、これらの調査研究を地質学研究者と共同で早急に行い、検証する必要がある。

(2) 地質調査の早急な実施と地形的特徴を考慮した津波シミュレーション

①平取町におけるアイヌ民族の口碑を地質学的見地から検証する津波堆積物調査

津波堆積物の調査は、沙流川流域全体で行い、総合的な調査を行うことが求められるが、当面、優先して、平取町のハイオピラ周辺を中心に、荷葉の旧コタン（東岸の畑地）などにおいて津波堆積物調査を行うことが重要であろう、当該地域での調査がポイントとなる。鍋沢保氏をはじめ、アイヌの伝説集にも採録されている口碑の信頼性が認められるということの影響は大きいからである。少なくとも、同様の口碑や伝説がある日高地方の他の河川流域、例えば、静内川（旧染退（しべちゃり）川）の津波が実際に起こった可能性の判断に大きな影響を与えることとなろう。

② 沙流川の地形的特徴を考慮した津波シミュレーション

①とあわせて、沙流川流域を遡上する津波のシミュレーションを行うことで、単なる津波堆積物が残された標高や堆積物だけではなく、津波の遡上の様子を知り、アイヌ民族の口碑の信頼性を検証することができる。

平取町のハイオピラの崖に津波がぶつかり数十メートルの水柱が上がったという鍋沢保氏の語りやロクンデエト[°]遺跡に残る津波伝説の検証も可能となろう。

その際、重要なことは、堤防等が作られる以前の明治の古地図によるシミュレーションと同時に日高自動車道の土手が沙流川流域下流と中流を分けている今日の地形に基づくシミュレーションも見ることが重要である。この日高自動車道の土手が沙流川下流域に与える影響がかなり大きいと思われるからである。

(3) 関連機関への情報公開と対策

こうした地質調査や津波シミュレーションにより、過去に沙流川を大津波が遡上し、大きな被害を出したことが明らかとなれば、直ちに関連自治体に情報提供して津波対策と防災教育への活用を提案することが重要である。

沙流川では、流域の小学校や中学校などの教育機関において、また、地域でも、大津波の襲来と浸水の可能性を前提とした防災訓練が行われているとは言い難い。東日本大震災での教訓を活かすためにも、早急な対応が求められる。

また、日高地方をはじめとする他のアイヌ民族の口碑を検証する津波堆積物に関する調査を発展させることが重要である。北海道東部の釧路や根室地方でも、アイヌ民族の口碑があるにもかかわらず、必ずしも今日の防災の取り組みや防災教育に活かされてはいない。

注

- (1) 野元弘幸「社会教育における防災教育の展開—東日本大震災記録誌の分析を中心に—」首都大学東京大学院人文科学研究科『人文学報』第501号、2015年3月、27-52頁。
- (2) 立根村史編集委員会『気仙・立根村史』平成26年3月、660-661頁参照。

- (3) 朝日新聞夕刊 2009年6月25日 島村英紀「スマトラ沖地震 大津波—先住民 伝承した知恵」やATDO (Assistive Technology Development Organization、特定非営利活動法人 支援技術開発機構) による「先住民族の津波伝承交流ネットワークの構築 (トヨタ財団2007年度アジア隣人ネットワーク)」事業参照。http://www.normanet.ne.jp/~atdo/project/project_h19toyota.html (2014年11月3日閲覧)
- (4) 先住民族であるマオリ民族は、ニュージーランドを「アオテアロア」と呼び、先住民族に関わる学術論文でも、Aotearoa/New Zealand という表記が行われることが多い。本論もこれに従う。
- (5) Darren N.T. King, James Goff and Apanui Skipper, “Maori Enviromental Knowledge and natural hazards in Aotearoa-NewZealand”, *Journal of the Royal Society of New Zealand*, Volume 37, Number 2, June, 2007, pp59-73. D.N. King, “Tsunami hazard, assesment and risk in Aotearoa-New Zealand: A systematic review AD 1868-2012”, *Earth-Science Reviews* 145, 2015, pp25-42.
- (6) 浜中町防災会議『浜中町地域防災計画』平成25年6月。
http://www.townhamanaka.jp/life/bosai.html (2016年9月13日閲覧)
- (7) 高清水康博「北海道における津波に関するアイヌ口碑伝説と記録」『歴史地震』第20号、2005年、183-199頁。
- (8) 同上
- (9) 「ト°」は、アイヌ語表記法によるもので、最終音節のtuの音。「トウ」と表記することもある。
- (10) 高清水康博「北海道の津波堆積物研究の現状と課題：17世紀巨大津波による堆積物の研究を中心に」『地質学雑誌』第119巻 第9号、2013年9月、599-612頁。
- (11) 高清水康博、嵯峨山積、仁科健二、岡孝雄、中村有吾、西村裕一「北海道胆振海岸東部から確認された17世紀の津波堆積物」『第四紀研究 (The Quaternary Research)』第46巻2号、2007年4月、119-130頁。
- (12) 野元弘幸「アイヌ民族・先住民族教育研究の課題と展望」日本社会教育学会編『アイヌ民族・先住民族』(日本の社会教育第58集) 東洋館出版社、2014年、8-25頁。
- (13) 鍋沢保氏インタビュー文字化資料「鍋沢保氏インタビュー記録 2016年2月24日」(未公刊) および音声記録。
- (14) 扇谷昌康・島田健一『沙流郡のアイヌ語地名 I』門別町郷土史研究会、1988年。
- (15) 国土交通省「沙流川水系流域および河川の概要」
http://www.mlit.go.jp/river/basic_info/jigyo_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/saru-5-04.pdf (2016年9月13日閲覧)
- (16) 門別青年倶楽部発行「日高の友」第十九号、明治42年8月8日。
- (17) 平取町史編集委員会『平取町百年史』第一法規出版、2003年3月、52頁。
- (18) 『広報ひだか』2016年9月号、Vol.126。

<http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/uploaded/attachment/5913.pdf>
(2016年9月14日閲覧)

(19) 日高町『日高町津波ハザードマップ』

<http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/soshiki/soumu/bosai-tsunamimap.html>
(2016年9月14日閲覧)

(20) 平取町役場ホームページ

http://www.town.biratori.hokkaido.jp/guide/guide_history/ (2016年9月14日閲覧)

(21) 『平取町防災ガイド』 <http://www.town.biratori.hokkaido.jp/map/>

(22) 富川町立富川小学校『平成28年度 学校経営の概要』

* 本稿は、日本社会教育学会第63回研究大会(2016年9月16-18日、弘前大学)での自由研究発表に基づき執筆したものである。

* 本研究は科研費研究「社会教育における防災教育のグローバル展開」(基盤研究(A) 2015-2019)による。